

胃 集 団 検 診 （ 地 域 ）

動 向

平成23年度住民対象の胃がん検診の受診者数は18,755名で、前年比310名の減少となった。厚木市において内視鏡検査、ペプシノゲン検査が導入され個別検診を選択する受診者が増えたことにより、集団検診の受診者数が減少（前年比マイナス1,183名）したことが最大の要因である。

「市区町村におけるがん検診の実施状況等調査結果」（各都道府県を通じ管内市区町村に対し、がん検診の実施状況〔平成22年1月1日現在〕について調査した結果）によれば、胃がん検診（複数回答可）を胃X線検査で実施している市区町村は99.2%、内視鏡検査は13.1%、ペプシノゲン法は3.0%、ヘリコバクテリウム抗体は1.0%などである。国の指針による検査法で実施している自治体がほとんどだが、今後、指針以外の検査法（内視鏡検査、胃がんリスク検診）も選択する自治体が増えていくものと思われる。

なお、協会は「神奈川県消化器がん検診機関一次検診連絡協議会」の事務局として、県内の一次検診実施機関が実施する消化器がん検診の精度・技術の向上のために協力している。

方法・結果

平成23年度地域検診における実施総数は18,755名（前年度19,065名）であり、胃がん発見数は35名（前年度27名）であった。要精密検査率は14.8%（前年度10.5%）、また要精密検査数2,775名（前年度2,005）

であったことより、陽性反応的中度（PPV）は1.26（前年度1.34）と平成22年度と比べ低い結果となった。

平成23年1月に、施設胃部I.I-DR装置をFPD（平面検出器）タイプのデジタル装置に更新した。これは平成8年導入の国内における初期型デジタル撮影装置の老朽化に伴う更新であり、画質向上と被曝低減の実現が可能となった。

また、神奈川県消化器がん検診機関一次検診連絡協議会技術部会の活動として、読影医と撮影技師との情報交換や症例検討などを目的とした施設交流会（下図）を、平成23年度より実施した。技術部会メンバー約10名程度が、各施設の読影現場を訪問し、撮影画像への要望や読影時の留意点などについて、読影医から指導を受けた。また、判定に苦勞する症例や、技師の透視観察の効果を認める追加撮影の一例などを各施設から持ち寄り、検証することにより撮影技術の向上や標準化が図られた。

一方、全国的な胃がん検診の動向としては、「胃がん検診専門技師認定制度」について、H23年度よりNPO法人日本消化器がん検診精度管理評価機構によるX線検診技術部門検定試験へ移行した。筆記試験のみで行われた従来に対し、基準撮影法によって撮影された持参フィルムの評価が、可否の判定に追加された。これにより、基準撮影法の普及と認定技師の技術的な底上げが期待できる。

今後は、指導者レベルの技師を認定する「読影検定」などが実施されていく方向性である。



関係の集計表は82頁に掲載